

樺太（北緯50度線） 紀行6日間の旅

〈8月22日～8月27日〉

—はじめに—

藤沼弘一（会員）

2016年10月20日に、銀座ブロッサム中央会館において「引揚70周年記念の集い」を開催し、満洲・樺太・朝鮮・台湾からの引揚げにからむシンポジウムなどで広く認識を新たにしました。特に樺太については、終戦前後の事実が一般的にはあまり知られてなく、イベント直後から「できたら樺太に行ってみよう」という声がありました。昨年初めに、全国樺太連盟さんをお訪ねしたところ、「善隣協会さんが主催して訪問団を派遣してくれるなら、連盟の方でも希望者を募りましょう」ということになり、結果、善隣

協会から14名、樺太連盟さんから7名、合計21名で8月22日から5泊6日の樺太の旅が実現することになりました。ロシア旅行社さんが旅行日程を立て、費用の関係から添乗員はなく、肖ながら私が世話役を買って出ました。しかし、皆様の意見を充分には把握できないまま、北緯50度から南へ帰る道中、「元来た道のオホーツク海側を戻るよりも、反対側の間宮海峡側を戻ったほうが見聞も広がるし良いであろう!」と思い込み、ガイドさんと相談しただけで実行に移すなど、一部の方には、不快な思いをさせてしまいました。この紙面をお借りしてお詫びを申し上げます。

今回、感想文をお願いした方は、鳥飼博志様、河田ゆい様、私が生まれたのは樺太豊原市で、今はユジノサハリンスク市。父親が勤めていた裁判所の官舎は丸太組み、室内にはベチカとシャンデリア、床はリノリウムという敷物が張ってありました。日本領になって30年たってもロシア人の住宅を使っていたのでしょう。家はもうありませんが、近くにあった日本時代の博物館が展示物も含めて今もそのまま博物館として使われており、拓殖銀行が外装を変えずに美術館になっていました。博物館の横の道を学校へ通っていた私は懐かしくホッとしました。ロシアの住宅で生まれたせいか日本時代の建物を大切に使用しているロシア人に妙に親しみさえ感じてしまいます。

子ども時代の思い出がし

佐瀬恒様、本間美奈様です。

71年振りのふるさと

鳥飼博志

（全国樺太連盟会員）

父親の転勤で暫く住んだ知取（マカロフ）の官舎前から高台に長い石段があり、万代寺がありました。樺太連盟からいただいた当時の市街地図で特定した官舎は集合住宅になっていて石段はすでになく、急斜面を草につかまりながら登ると寺の礎石と思われる大きな石があり、数頭の牛が草を食んでいました。記憶では本当に大きなお寺で、私たち子どもは焼印を押したおまんじゅうを住職の奥様からいただくのを楽しみに、連れだつて高い石段を登ったことを懐かしく思い出しました。寺への急斜面を先頭に立って現地を確認してくれたガイドさんや、私個人の思い出の場所探しに付き合つて、いっしょに崖を登ってくださった同行の方がたにはお礼の言いたいもなく、その暖かさは忘れられません。

戦争が終わって引き揚げ

豊原公園の池にはよく釣りに行き、ボートに乗りました。若い海軍士官が潜水したままプールを何周かしたのを見て「すっ

「ごいなー」と言い合ったのは軍国少年として当然のことでした。日露戦争時の旧式砲台がある神社付近のやぶは戦争ごっこの戦場でした。零下30度になる冬はプールがスケート場に変わり、大鍋で沸かす牛乳が飲めるスキー行軍訓練も楽しい思い出のひとつ。そんな子どもの日常はソ連の軍政下で一変。ロシアの子どもとロシア語で喧嘩する日々。

そして1年3か月が過ぎて真岡（ホルムスク）の収容所で引揚船を1か月待ちました。山の上の収容所から真っ白い船体に真っ赤な赤十字マークを付けた引揚船を見ても、まだ半信半疑。「シベリアに連れていかれる」などの流言があり、素直に喜べなかったのでしょうか。引揚の持ち出し制限で大人も子どもも着られるだけ重ね着し、リュックにあれこれ詰め込み、持てる限りの荷物を提げて乗船。遠くなくていく山や真岡の港を押し黙って見ていた人びとは、二度と帰るあてのないふるさとを心に焼き付けていたのでしょうか。ツア

ーに持参した亡き父母、弟妹の写真とともに昔の思い出をさがし、心ならずも別れを告げたふるさとを見ることができました。参加できて本当によかったと思います。

樺太紀行6日間の旅に参加して

河田ゆい

（全国樺太連盟会員）

平成29年8月22日（火）〜27日（日）の間国際善隣協会が主催する表題の旅行に参加した。私自身は全国樺太連盟の会員である。私の父方の祖母は真岡郡清水村で生まれ真岡で育ち、母方の祖母は留多加郡留多加町で生まれ極保で育った。今回の旅を知ったきっかけは、全国樺太連盟（以下、樺連）の月刊紙「樺連情報」での募集記事による。国際善隣協会（以下、善隣）は、満洲からの引揚者の方々とそのご遺族の方々が多くとお聞きしたので、簡単に樺太のことを記したい。なぜなら、学校で

は「世界史」で樺太のことをサハリンと呼び、先の大東亜戦争で日本が負けたからロシア領となったと教わるが実はそれは根本的に誤りであるということを、皆様と一緒に考えるきっかけにしたいからだ。

私自身、数年前まで北方領土とは歯舞・色丹・国後・択捉の四島のことだと思っていたし、学校のテストではこれが正しい回答だった。しかし、少なくとも私の調べた限りでは事実ではない。そもそも大東亜戦争で日本が戦ったのは連合国（主に米国）であり、ソ連との間には日ソ中立条約（日ソ不可侵条約）が締結されていた。1945年4月にソ連が一方的に条約の自動延長を破棄する通告をしたが、破棄後も1年間は有効なものと規定されていた。

樺太・北千島・北方四島・北海道の占領を以て論んで工作活動が続けていたソ連は同8月9日に、突如として日ソ中立条約を一方的に破棄し、侵攻を開始した。この行為は火事場泥棒に等

しい。国際法では戦争する国の民間人（軍人・軍事施設以外）を狙った攻撃を禁じている。しかし突如現れたソ連軍は、逃げ惑う私たちの先輩方を狙い、略奪・強姦・無差別大虐殺を行った。どれほど恐ろしい思いをさせられたか。どれほどの痛みや傷、絶望を負わされたか。そのような状況下で人のために生き、散華されたたくさんの方々の英霊を思うとき、その崇高な魂に感謝と尊崇の念しかない。私のふたりの祖母もきつと名も知らないたくさんの方々の英霊に助けられ、無事引き揚げてくることができたのだと思う。そして祖母が命を繋いでくれて私がいる。どれだけ多くの日本人に護られた結果としていま自分が生かされ存在しているのだろうか。今この瞬間も日本への帰国を願ひながら、未だに樺太の地に眠るご遺骨が多くあることに胸が痛む。

米艦ミズーリで日本は1945年9月2日に降伏文書に調印した。ロシアは、日本が降伏した1945年8月15日（昭和天

皇の玉音放送の日)ではなく、この9月2日が終戦日であるから、それまでに占領した国後・択捉・歯舞・色丹はロシアのものだと主張している。仮にロシアのこのロジックで見ても、9月2日以降に侵攻し占領した歯舞についてはロシアが実効支配を行う理屈は存在しない。その後のサンフランシスコ平和条約(1951年9月)で「日本は樺太の一部と千島列島に対するすべての権利、権原及び請求権を放棄したが、ソ連はこれに署名しておらず、同条約上の権利を主張することはできない」旨、外務省HPに記載がある。これはその通りであるのだが、ここでいう千島列島とは、国後・択捉・歯舞・色丹のことではなく、ウルップ島以北から占守島までの18の島々のことである。これは、丹波實氏(樺太生まれ、元駐ロシア大使。北方領土が日本に一番近づいたエリツィン大統領との交渉時期に外務審議官として国益のために尽くされた。2016年10月ご逝去)が、こ

高齢になり健康に不調を抱えながらも報道番組に出演され、魂から絞り出すように揺るがない力強い精神力で訴えてこられたことだ。今まで疑いもしなかった前提が、ひっくり返ったのではないだろうか。

実は、民主党(現・民進党)政権下になるまで我が日本国の課税台帳には南樺太と千島列島全部について日本の領土としての記述があったという。2009年に発足した鳩山由紀夫内閣において、国民に何も知らせないまま、私たちの大切な北方領土の島々を帳簿から削除してしまったのだ。

北方領土は、もう昔の話だろうか。島根県隠岐の竹島は韓国に奪われたままだ。日本の漁師さんが日本領海内である日突然侵攻してきた韓国軍に殺された事実をご存知だろうか。「平和的解決」を求めるべきだということもあるだろう。しかし罪なき日本国民が殺された時点で、既に「平和」という事態ではない。自国民や領土を自分で守れ

ない国が国家といえるか。私は自問する。自分の大切な家族や友人を守らない国でいいのか。歪められた史実を次世代に引き継いでいいのか。そんな今の私たちは、身を賭してこの国を護ってくれた英霊に向き合い、恥ずかしくないと言えるか。今回の樺太紀行には直接関係ない話と思われるかも知れない。しかし、樺太の歴史は現在と真っ直ぐ繋がっている。そして根っこは、実は全てに繋がっている。私はそう思う。

さて、話を戻して現在の樺太(サハリン)を訪ねた感想であるが、日本とロシアとの経済力の差を肌で感じるものとなった。南樺太をほぼ一周したが、日本が72年より遥か以前に造った鉄道や橋、家、郵便局や荘厳な建物(旧拓銀や病院)等、現在もほぼそのままの状態で使用されていた。ロシアはこの72年間インフラを整備することはおろか、旧王子製紙工場などを一旦更地にすることも、新たに建設することも殆どしていない。そのお

陰と言ってはなんだが、少し北に行くと、ソ連侵攻まで私たちの先輩が住んでいた様子、見ていたであろう自然風景を、恐らく自分もいま見ているのだろうという気になった。

ロシアは日本の経済力と技術力が喉から手が出るほど欲しい。そもそもロシア製の電子機器や家電など聞いたこともない。今回の旅行で泊まったホテルの部屋にあった家電は韓国製が多かった。韓国の国家予算は日本の一都市である東京都とほぼ同じだ。ロシアの国内総生産(GDP)はその韓国よりも劣る。

南樺太は本当に美しかった。豊原(ユジノサハリンスク)から北緯50度線へ向かって北上するときは右手に美しい海と、海岸にどこまでも沿っていく鉄道(私の曽祖父母くらいの年代の日本人が造った鉄道だ)、左手には美しい山の景色が続いた。ふと、できることならふたりの祖母にはこの美しい島で、この景色を見ながら生涯ずっと幸せに過ごして欲しかった、と車窓

から祈るような気持ちになった。公平を期すために敢えて記しておきたいことがある。私は前述のようなソ連と日本との史実から、ロシア人とは野蛮な民族だと思っていた。しかし私の旅行中の経験では民間のロシア人に助けられたことが多くあった。ガイドをしてくれたのはロシア人女性の綺麗な方で、バスを運転してくれたのはタジキスタン出身の男性だった。お二人とも、私たちの様々な相談事に対していつも機敏に献身的に、そして常に快く応じてくださった。

樺連からの参加者は、ご自身の故郷が樺太であったり、大切なご親族・ご友人が樺太に住んでおられた方が殆どなので当然ながらそれぞれに辿りたい思い入れのある場所があった。それぞれの想いに寄り添い、フェアにガイドを勤めてくださったオリガさんに改めて心から感謝を申し上げたい。また、北のホテルで日本語も英語も通じず困っていた時、たまたまロビーに居合わせたロシア人の青年に助け

られたり、小学校で突然トイレを貸していただいたりもした。スパシーバ（ありがとう）と伝えると殆ど必ずパジャールスタ（どういたしまして）と返事が返ってきた。少なくとも私が出会った南樺太に住むロシア人はおよそ皆親切であった。しかし、彼らはどのようにしてこのサハリンが彼らの居住地となるに至ったのか、（ロシアは共産圏であるので言うまでもないが）彼らもまた学校で真実を教えられてはいない。そのことが私の頭の中にくっきりと影を作り、複雑な心境が交差した。ただ、もし旅行中にガイドさんと運転手さんに何かあったとしたら、私は迷わず彼らを助けるために自分にできることをしたと思う。誰に教わった訳ではないが、それが日本人だと、私の愛する曽祖父母、祖父母、そして両親がそれぞれの生き方を通して教えてくれたのだと思う。

海外に行けば日本人は歓迎されるのが殆どだ。それは先人がその尊く崇高な生き方を通して築いてくださったものである。まずそのことを知ることが、歪められた近代史観から脱却し私たちの根っこに気づきつけかけになると思う。根っこは全てに繋がってくれている。

色々なことがあった今回の旅ではあったが、私にとって本当に良い経験をさせていただいたと思う。今回の旅を主催された国際善隣協会とその参加者の皆様ならびに、全国樺太連盟と参加員の皆様にはたいへんお世話になり、ここで改めて感謝の意をお伝えし、私の樺太紀行を締めさせていただきます。

色々なことがあった今回の旅ではあったが、私にとって本当に良い経験をさせていただいたと思う。今回の旅を主催された国際善隣協会とその参加者の皆様ならびに、全国樺太連盟と参加員の皆様にはたいへんお世話になり、ここで改めて感謝の意をお伝えし、私の樺太紀行を締めさせていただきます。

樺太訪問6日間の旅

佐瀬 恒（会員）

第1日目、8月22日（火）

成田空港第1ターミナルに午後2時に総勢21名が予定通り集合し、ヤクート航空550便で午後4時50分に出発、樺太・豊原（ユジノサハリンスク）には、現地時間午後9時に到着しました。夕闇の中、遅く到着した空

港ロビーには、ロシア人のガイドさんと、今回の旅の小型観光バスの運転手さんの出迎えを受け、直ぐにホテルに向かいました。ホテルは「ガガーリンホテル」、人類初の宇宙飛行士の名の付けられたホテルで、樺太の第1日目の夜は、宇宙に夢を馳せながら眠りにつきました。

第2日目、8月23日（水）

朝6時に起床、7時にホテルの食堂で朝食、バイキング形式でなくテーブルには簡素なメニューで個々に1人分セットされていて、正に観光地に観光に来たのではないことを強く感じながら食事を済ませました。午前9時にホテルを出発、約300キロを北の敷香を目指して。初めに43km先のオホーツク海沿いの町、落合へ。落合では、旧王子製紙の廃工場（樺太には当時9工場あった）、その当時の引き込み線などを散策、落合の後には、浜辺の村・栄浜へ、鄙びた寒村と云う感じだが、この部落は、大正時代の詩人・宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の舞台にも

なった砂浜だと云う……。その砂浜を後にしてオホーック海岸沿いの寒々とした街道を北上し50km先の白浦へ、白浦では、白浦神社と鳥居跡を散策し再び海沿いの道を北上し、側溝のない道には、白樺林の道が続き、その道を知取へ、知取では慰霊碑に参拝した後、一路、豊原からは288km先の敷香のセーベルホテルへ午後7時に到着しました。この時、4階建てのホテルにはエレベーターがないことに気づきました。重い荷物は全部、運転手のマンスールさんが部屋の前まで運んでくれたのです。20kg近い荷物を両手に持って、何回も往復してくれたのには、感謝と驚きの気持ちが一杯にになりました。

第3日目 8月24日(木)

今日はこのホテルに連泊のため、身軽な身仕度で観光バスへ。また、今日はこの旅行の目玉でもある慰霊の行事を行う計画である。まずはじめに地元の花屋さんによって白い生花の花束を購入。一路「樺太・千島戦没者

慰霊碑」に向かいました。途中に、「日ソ平和友好の碑」、北緯50度の国境の礎石、日本軍のトーチカの跡などを見学しながら慰霊碑へ。静かな林の中のたたずまいで、それはありました。お花をささげ、香を焚いて、全員で黙祷をし、記念撮影をしました。この舟の形をした慰霊碑は21年前に作られたことが分かりました。日本語とロシア語の両方で、樺太、千島列島地域で亡くなった日本人、ロシア人合わせて2万人近い御霊を慰霊し、未来に向かって両国の友好を希求することが書かれていました。この行事の後、高い煙突と5階建ての大きな廃墟、旧王子製紙工場を見学しました。また、今回の旅行のメンバーで、この北緯50度近い地にゆかりのある場所を訪ねたり、横綱大鵬の小さな銅像のある公園を回ったりしました。今日は何か想い出深い、心に残る1日となりました。

第4日目 8月25日(金)

今日は、Uターンをする1日で南下する計画。島の中央部で

西に向かって横断し、間宮海峡沿いに南下をしました。走行距離300km以上となった長いバスの旅でした。午前中は晴れたり曇ったり雨になったり、めまぐるしく天気が変わりましたが、午後からは、だんだん晴れてきて、間宮海峡の向こう側に太陽が徐々に沈む時刻が近づいてきて、海はベタなぎのように静かでした。途中、チェーホフという田舎町(旧野田)を通りましたが、駅前にチェーホフの胸像があるだけで、ほんとに何も無い街だと感じました。長いバス旅行の後、いくらか町らしい真岡の市内に入り、車の流れが多くなり、何故か懐かしく思いながら、ホルムスクホテルへチェックイン。みんなでビールとウオッカで乾杯をし、長い1日が終わりました。

第5日目 8月26日(土)

朝一番に真岡の町を見下ろせる丘に登り、みんな真岡港に向けてシャッターを切っていました。そのあとは巨大な廃墟となつて

を散策、更に旧真岡病院、旧真岡神社跡、旧真岡郵便局、などを観光してから、豊原にむけて出発。真岡から豊原までは、なだらかな峠道で、中程の熊笹峠には、日本軍の陣地跡とトーチカ、そしてその傍には、ソ連軍の戦勝記念碑、やり切れない思いで、黙祷をしました。その後、豊原市内へは、午後2時前に着きました。豊原は日本の施政下(72年前)では南樺太の中心的な町。旧樺太神社跡の石段を登り、ガガーリン記念公園(旧豊原公園)、それからサハリン州立郷土博物館などを見学しました。郷土博物館とはいうものの戦勝記念なのか自動小銃が無造作に飾ってあったのには何故か怒りがこみ上げ、直ぐ館の外に出てしまいました。その後、州立美術館(旧拓殖銀行)を見学してから、明日は帰国のため、お土産を買いに土産店や大型スーパーへ、そして最後の日は、日本食レストラン「ふる里」で夕食をとり、初日に泊まったガガーリンホテルへ帰ってきました。

第6日目 8月27日（日）

最終日、午前5時30分に早起きをして、6日間の旅の荷物を纏め、ホテルを早めの午前8時にチェックアウトした後、空港へ。途中、ガイドさんの家族から手作りの朝食の差し入れがあり、無事にユジノサハリンスク空港へ。それから、シベリア航空でウラジオストク空港へ。ウラジオストクでは、トランジットで3時間程待つて午後1時30分、シベリア航空で成田へ、到着後、個々にトランクを引き取り流れ解散、今度の旅は終わりました。21人のメンバーは、平均年齢76歳、全員無事に帰れたこと、そして一番のお土産は、それぞれが旅の思い出をしっかりと脳と心に刻み付けたことだと思いました。

今は近くて遠い豊穡なる大地、樺太

本間美奈

本年8月22日から6日間の樺太ツアーに両親と共に参加いた

しました。ツアーについては全国樺太連盟発行の樺太情報誌に掲載されている案内をみて、祖父が働き、母が生まれた敷香（現ポロナイスク）、旧ソビエトと日本の国境だった北緯50度線、大叔母が暮らしていた真岡（現ホルムスク）を巡るという、個人ではなかなか行かないルートでしたのですねに申し込みました。数年前にクルーズで大泊（現コルサコフ）へ入港、オペ

ショナルツアーで豊原（現ユジノサハリンスク）を巡ったことがあります、駆け足ツアーでしたので樺太博物館、小さなロシア正教会などを見ることができたのでした。その時に見た樺太は極東ロシアの片田舎、そんな印象でした。頃良く、ツアー出発の1週間ほど前にNHKで「樺太地上戦 終戦後7日間の悲劇」という番組が放映されました。それを見て、改めて当時樺太に住み普通の生活を営んでいた祖父、大叔母を含め多くの人々が、ソビエトと日本が締結していた中立条約を一方的に破

棄して侵略してきたことに対してどれほどの苦しみと悔しさを味わったのだろうか、と、言葉を失いました。

樺太で一番大きい敷香の王子製紙工場でエンジニアとして勤務していた祖父からは生前樺太時代の話を聞いたことがありません。いつも笑顔を絶やさなかった祖父ですが、樺太でのことは封印してしまったようです。

私が聞いた樺太に関しての多くは仲が良かった大叔母が語ってくれたものでした。今回のツアーでは日本統治時代のことに詳しいロシア人ガイドさんが巡る先々で日本時代の詳細を懇切丁寧に語ってくれたことに驚き、また、それらの話は樺太に親類がいた者にとっては大変貴重な情報となりました。

ユジノサハリンスクには日本統治時代の建造物がソビエト時代も継続利用され、現役のものもある中、郊外へ行けば行くほど多くが廃墟となって放置されていました。当時樺太には20両以上のD51機関車がありました。

輸送物資を満載して豊原と敷香の間を忙しく往復し、その沿線に設けられた町々にも今では見られない活気と賑わいがあったはず。

現在の樺太の風景を記憶しつつ、頭の中で当時の賑わいを映像化しながら各地を巡りました。そして樺太を守ろうと終戦後も戦わざるを得なかった方々のご冥福をお祈りしてまいりました。

多くの自然に恵まれたおおらかな北の大地、樺太は、未だ日本統治時代の空気が残っています。大変有意義なツアーでしたが、ツアー4日目、参加者に事前通告なく突然ルートの変更がなされ、予想外の悪路をひたすら耐えることになりました。両親を含め、高齢の方々が多かったツアーでしたのでとても心配な半日でした。全員が無事に帰国できてホッとしておりますが、今回のツアーを振り返る度に、この一件がつかまとうことになってしまったのは大変残念なことでした。